京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報　2004-7

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報　二〇〇四―七

史 跡・名 勝　嵐 山

史跡・名勝　嵐山

2004年

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

史 跡 ・ 名 勝　　嵐 山

2004年

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

序　　文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用を図っていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方米から、数千平方米におよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび建物新築工事に伴う史跡・名勝　嵐山の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気付きのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成16年11月

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　川　上　　貢

例　　言

1　遺　跡　名　　史跡・名勝　嵐山

2　調査所在地　　京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町11番地

3　委　託　者　　財団法人　小倉百人一首文化財団　理事長　山内 溥

4　調 査 期 間　　発掘調査：2004年６月７日～2004年９月25日

　　立会調査：2004年10月25日～2004年11月30日

5　調 査 面 積　　約800㎡

6　調査担当者　　内田好昭・卜田健司

7　使 用 地 図　　京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「嵐山」を参考にし、作成した。

8　使用測地系　　日本測地系（改正前）平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位 (m) を省略した）

9　使 用 標 高　　T.P.：東京湾平均海面高度

10　使用基準点　　京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。

11　使用土色名　　農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。

12　遺 構 番 号　　通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。

13　遺 物 番 号　　掲載順に通し番号を付した。

14　掲 載 写 真　　村井伸也・幸明綾子

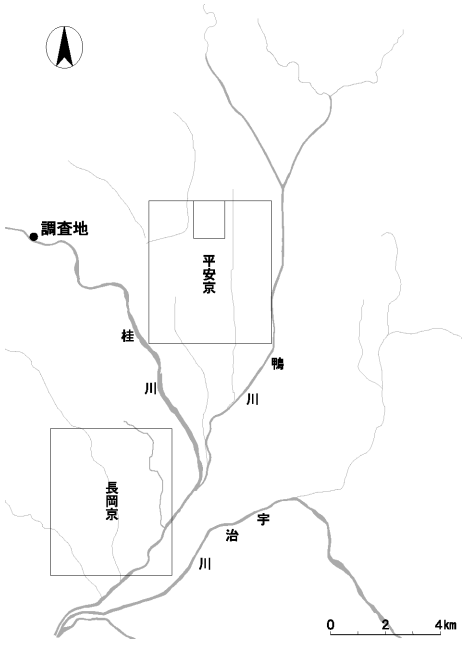
15　遺 物 復 元　　村上　勉・出水みゆき

16　基準点測量　　宮原健吾

17　本 書 作 成　　内田好昭

18　編集・調整　　児玉光世・大立目　一

19　獣骨の種類については、松井章氏と丸山真史氏の御教示を得た。



（調査地点図）

目　　次

１．調査に至る経緯と調査経過 …… 1
２．位置と環境 …… 2
（１）位置と環境 …… 2
（２）これまでの調査 …… 3
３．遺　　構 …… 4
（１）遺構の概要 …… 4
（２）基本層序と遺構検出面 …… 4
（３）江戸時代 …… 6
（４）室町時代 …… 8
（５）鎌倉時代 …… 11
（６）平安時代 …… 12
４．遺　　物 …… 14
（１）遺物の概要 …… 14
（２）土器類 …… 14
（３）瓦　類 …… 18
（４）自然遺物 …… 23
５．ま と め …… 23

図　版　目　次

図版１　遺構　１　試掘調査全景（北東から）
２　１区第１面全景（東から）
図版２　遺構　１　建物１下の石列（南東から）
２　建物２（東から）
３　瓦溜２（北東から）
図版３　遺構　１　１区第２面全景（東から）
２　建物３と庭園遺構（北西から）
図版４　遺構　１　建物３（東から）
２　景石２および特殊遺構231（北東から）

図版５　遺構　１　景石１（南から）
２　溝224（北から）
３　２区全景（北から）
図版６　遺構　１　３区第１面全景（西から）
２　３区第２面全景（北から）
図版７　遺物　縄文土器・奈良時代から鎌倉時代の土器類
図版８　遺物　土壙170出土土師器・瓦器・陶器
図版９　遺物　土壙170出土須恵器・焼締陶器
図版10　遺物　土壙170出土瓦質土器
図版11　遺物　奈良時代から平安時代の軒瓦
図版12　遺物　鎌倉時代の軒瓦
図版13　遺物　室町時代の軒瓦
図版14　遺物　江戸時代の軒瓦・室町時代の瓦のタタキ目および刻印

挿　図　目　次

図１　調査位置図（１：2,500）…… 1
図２　調査前全景（南東から）…… 2
図３　調査区配置図（１：1,000）…… 3
図４　３区東壁断面図（１：40）…… 4
図５　第１面平面図（１：200）…… 5
図６　建物２実測図（１：100）…… 7
図７　第２面平面図（１：200）…… 9
図８　景石２・特殊遺構231実測図（１：50）…… 10
図９　建物３実測図（１：100）…… 11
図10　第３面平面図（１：200）…… 13
図11　１区出土縄文土器拓影・実測図（１：３）…… 14
図12　溝224出土奈良時代から平安時代前期土器類実測図（１：４）…… 15
図13　溝224出土平安時代後期から鎌倉時代土師器実測図（１：４）…… 16
図14　特殊遺構231出土土師器実測図（１：４）…… 16
図15　土壙170出土土器・陶器類実測図（１：４）…… 17
図16　奈良時代から平安時代軒瓦拓影・実測図（１：４）…… 18
図17　鎌倉時代軒瓦拓影・実測図（１：４）…… 19

図18　室町時代軒瓦拓影・実測図（１：４）　…… 21
図19　江戸時代軒瓦拓影・実測図（１：４）　…… 22
図20　室町時代瓦類の刻印拓影（１：４）　…… 22
図21　室町時代平瓦のタタキ目拓影（１：４）　…… 22

表　目　次

表１　遺構概要表　…… 6
表２　遺物概要表　…… 16

史跡・名勝　嵐山

１．調査に至る経緯と調査経過

この調査は、「小倉百人一首の殿堂（仮称）」建設工事に伴う発掘調査である。調査地は、北側は天龍寺の塔頭である宝厳院に隣接し、西は亀山の丘陵斜面、南は大堰川に面している。この場所は国指定の史跡・名勝嵐山の範囲に含まれる。また、鎌倉時代には院の御所である亀山殿が、室町時代より江戸時代にいたるまでは天龍寺が経営された旧地であることが知られている。調査地周辺の考古学的調査では、平安時代前期の遺構と遺物も多く発見されている。

まず、2004年５月11日から６月４日まで試掘調査（調査略号2004UZ-OH001）を行った。試掘調査では、現地表下30～40㎝に室町時代から江戸時代の天龍寺に関連する遺構面が存在することを確かめた。また、その下層に亀山殿期と考えられる遺構面、さらにその下層に平安時代前期の遺物を含む地層も確認した。試掘調査の結果により、建設工事によって少なくとも天龍寺期の遺構の破壊は免れないと判断されたため、発掘調査を行うこととなった。ただし、当地は史跡・名勝の範囲に含まれるため、重要な遺構が検出された場合には建築の設計変更等による保存措置がはかられる必要があった。そのため、京都府、京都市等の関係機関と協議しつつ調査を進めることになった。

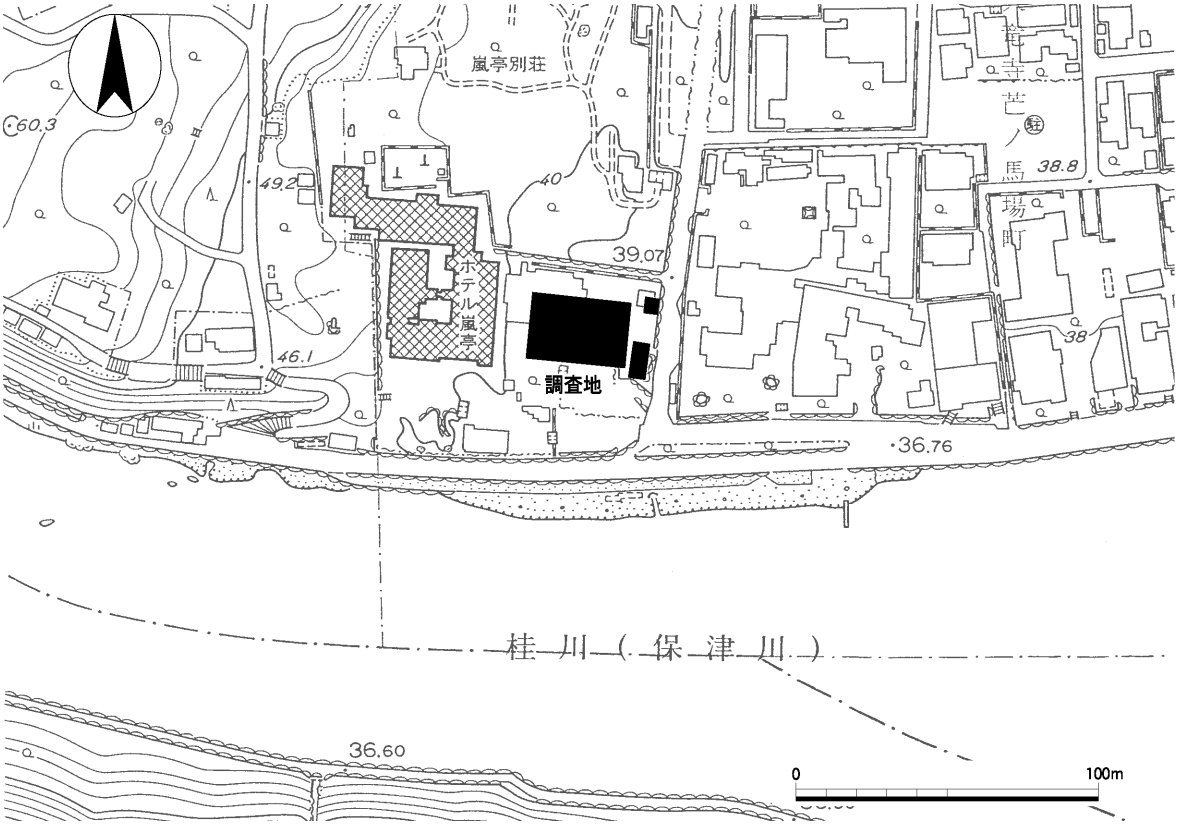


図１　調査位置図（１：2,500）

図２　調査前全景（南東から）

2004年６月７日より、１区の調査を開始した。第１面は室町時代から江戸時代にかけての遺構面で、天龍寺に関連する遺構群を検出した。第２面では、鎌倉時代の亀山殿期の庭園跡などの遺構群を検出した。この遺構群とさらに下層に存在すると見られる平安時代の遺構群は、建築の設計変更によって地中に保存されることになった。そのため平安時代の遺構面は部分的に確認するのみに留めた。１区を埋め戻した後、９月10日から２区と３区の調査を開始した。２区は調査区全体が流路60と称した低地にあたったため、天龍寺期の遺構面が工事掘削レベルより下位に及んだ。そのため、第１面のみ平面的な調査を行い、亀山殿期以前については部分的な断割り調査によって下層の状況を把握するのみに留めた。工事掘削深が深くまで及ぶ３区は、検出遺構の重要度に配慮しつつ、上記２面に加えて平安時代（第３面）の調査を行った。３区では、調査区全面に天龍寺期の大溝が検出され、平安時代から亀山殿期までの目立った遺構は検出されなかった。すべての調査区の調査最終遺構面は砂と土嚢で養生し、その上から残土で埋め戻した。９月24日に現場作業を終了し、同25日に現場事務所等を撤収した。なお、建築工事に伴って合計５日間にわたる立会調査を行い、記録の採取に努めた。

２．位置と環境

（１）位置と環境

調査地は、嵐山と小倉山の間の谷から平地に流れ出た大堰川左岸に広がる沖積平野の南西隅に位置する。調査地の北側と東側は嵯峨野と呼ばれる平地が広がる。西は小倉山南端の亀山の斜面に連続する。南は大堰川に面し、対岸は嵐山である。

嵯峨野は平安京の西の郊外で、平安時代には天皇の離宮や貴族の別業が多く営まれた。調査地が近接する嵐山と大堰川は古くから景勝地として貴族層に愛され、遊興や詩歌の名所であった。平安時代前期の調査地付近の様子を示す資料として『山城国葛野郡班田図』がある[1)]。これによれば、調査地周辺は耕作地や「野」のなかに宅地が散在するような景観であった。

鎌倉時代には、後嵯峨上皇が調査地を取り込む一帯に亀山殿を造営した（1255年移徒）。亀山殿は、後嵯峨上皇没後も亀山、後宇多両上皇の御所として使用され存続した。亀山殿は大堰川の水を利用した園池と、対岸の嵐山の景観を取り込んだ南庭を有したとされる[2)]。『山城国嵯峨亀山殿近辺屋敷地指図』等によれば、調査地は亀山殿の南西隅部分に位置し、主要な殿舎の南に広がる庭園の一画に該当するものと思われる。

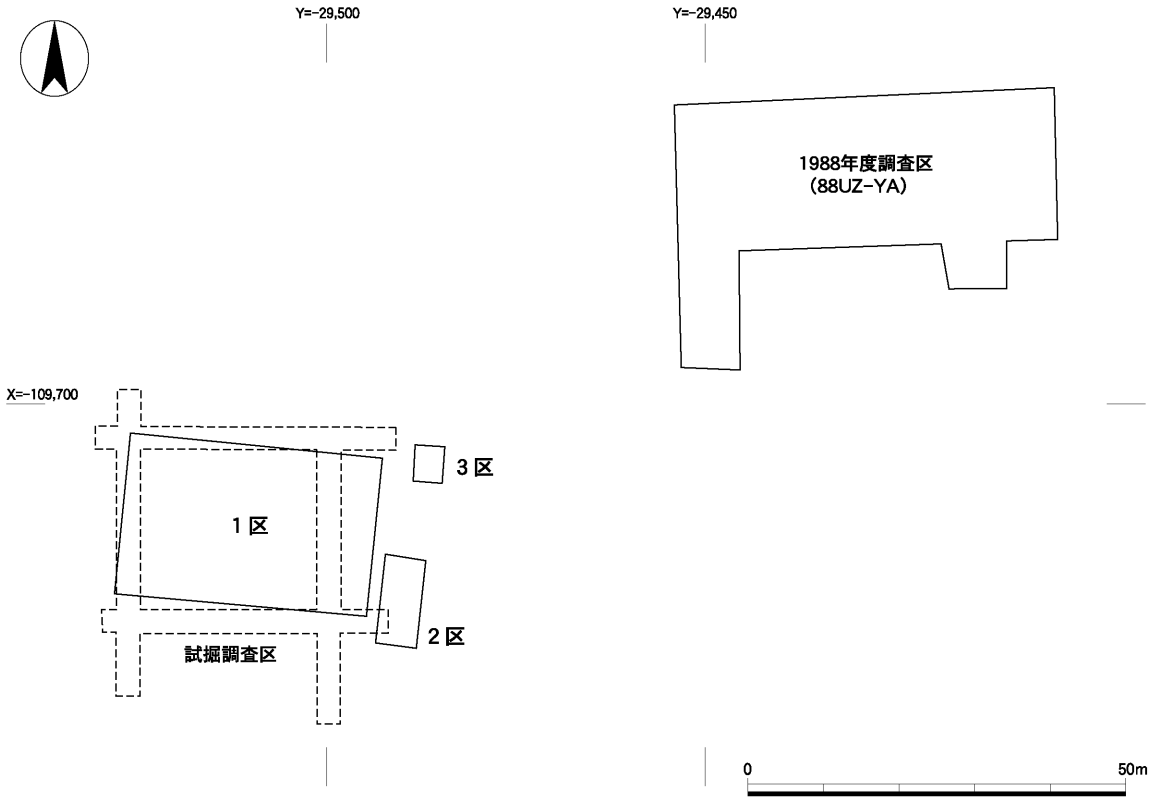


図３　調査区配置図（１：1,000）

室町時代には、亀山殿旧地に天龍寺が造営された（1345年完成）。15世紀前半の天龍寺の様子を描いた『山城国嵯峨諸寺応永鈞命絵図』によれば、調査地付近は天龍寺の中心伽藍域の内側に含まれ、近くには夢窓国師によって定められた天龍寺十境のうちのひとつである「龍門亭」が描かれている。

江戸時代後期には、天龍寺の塔頭三秀院が現在の京福電鉄嵯峨駅前付近から調査地およびその西側の敷地に移された。三秀院は禁門の変（1864）の際に薩摩軍の砲撃により焼失し、近代以降は他所に移った[3)]。同時に調査地は天龍寺の寺域からはずれた。

（２）これまでの調査

今回調査地の北東50～90mの地点で、1988年度に発掘調査が実施されている。この調査では、平安時代の池と洲浜が検出され、９世紀前半の遺物が多量に出土している。また、室町時代の東西方向の溝が検出されている[4)]。1991年に調査地東の南北道路で実施された立会調査では、平安時代前期の遺物を多く含む土壙100が検出されている[5)]。なお、調査地周囲の平安時代前期の遺構群は、桓武天皇の大堰行幸に関連する遺構と考えられている[6)]。

３．遺　　構

（１）遺構の概要

検出した遺構は平安時代から江戸時代にかけてのもので、その総数は約260に及ぶ。まず基本層序と遺構検出面を明示したうえで、調査の進行過程にしたがい第１面の遺構から順に概説する。

（２）基本層序と遺構検出面

現代盛土層（層厚約30㎝）の下位に以下の基本層がある。括弧内はおよその層厚である。**１層**（５～15㎝）…10YR3/4暗褐色砂泥・江戸時代後期の整地層、**２層**（５～10㎝）…10YR4/3にぶい黄褐色砂泥・江戸時代前期の整地層、**３層**（20～60㎝）…10YR4/6褐色砂泥・室町時代の整地層、**４層**（５～15㎝）…10YR3/3暗褐色泥砂・鎌倉時代の小礫敷の整地層、**５層**（≧50㎝）…10YR3/4暗褐色砂泥・平安時代整地層、**６a層**（45～65㎝）…10YR4/4褐色礫混砂泥・平安時代以前の堆積物、**６b層**（70～100㎝）…10YR3/4暗褐色礫混砂泥・平安時代以前の土石流的堆積物、**７層**…砂礫・沖積層。

７層は遺跡の基盤を形成するいわゆる地山であるが、軟弱な水成層で沖積層である。遺物は含まない。６a層は１区の東部および２区と３区で第８層の上位に堆積する地層で、これも無遺物層である。６b層は、調査地西の中高位段丘もしくは山地から流入したと思われる土石流的な堆積物で、１区の中央部から西半部にかけて第８層の上位にのる。巨礫を多量に含み遺物は含まない。６a層、６b層とも地山とみなしてよいものであるが、両層の先後関係は不明である。６層が堆積した段階で調査地内の地形は北西が高く南東に向かって緩やかに下る地形となるが、奈良時代から平安時代前期に１区中央部から東側に５層の堆積が確認できる。この頃に人為的な斜面の切盛がなされたものと思われる。５層の東側は平安時代の段階で１区西半より一段低い平坦面となる

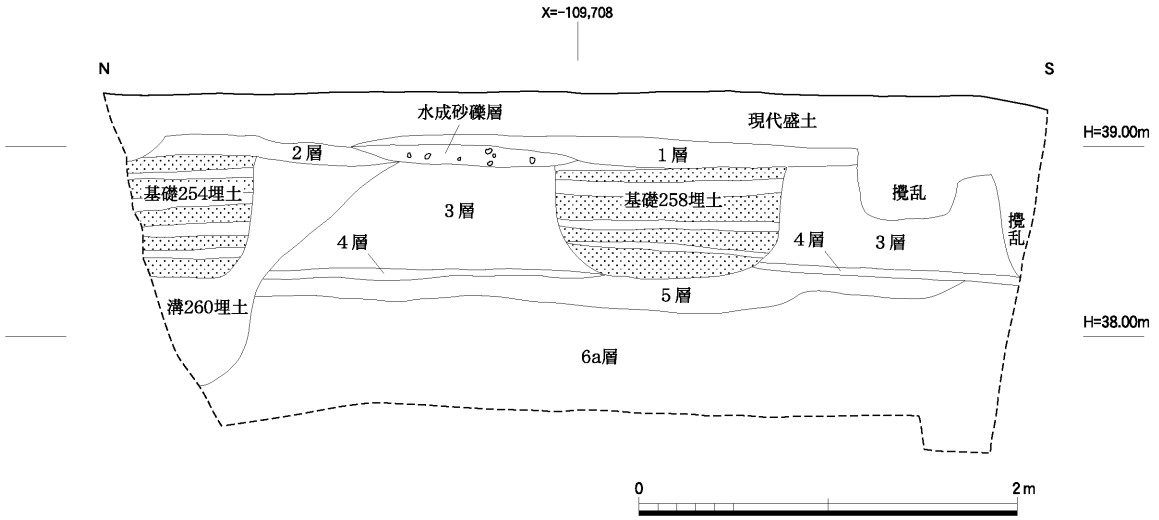


図４　３区東壁断面図（１：40）

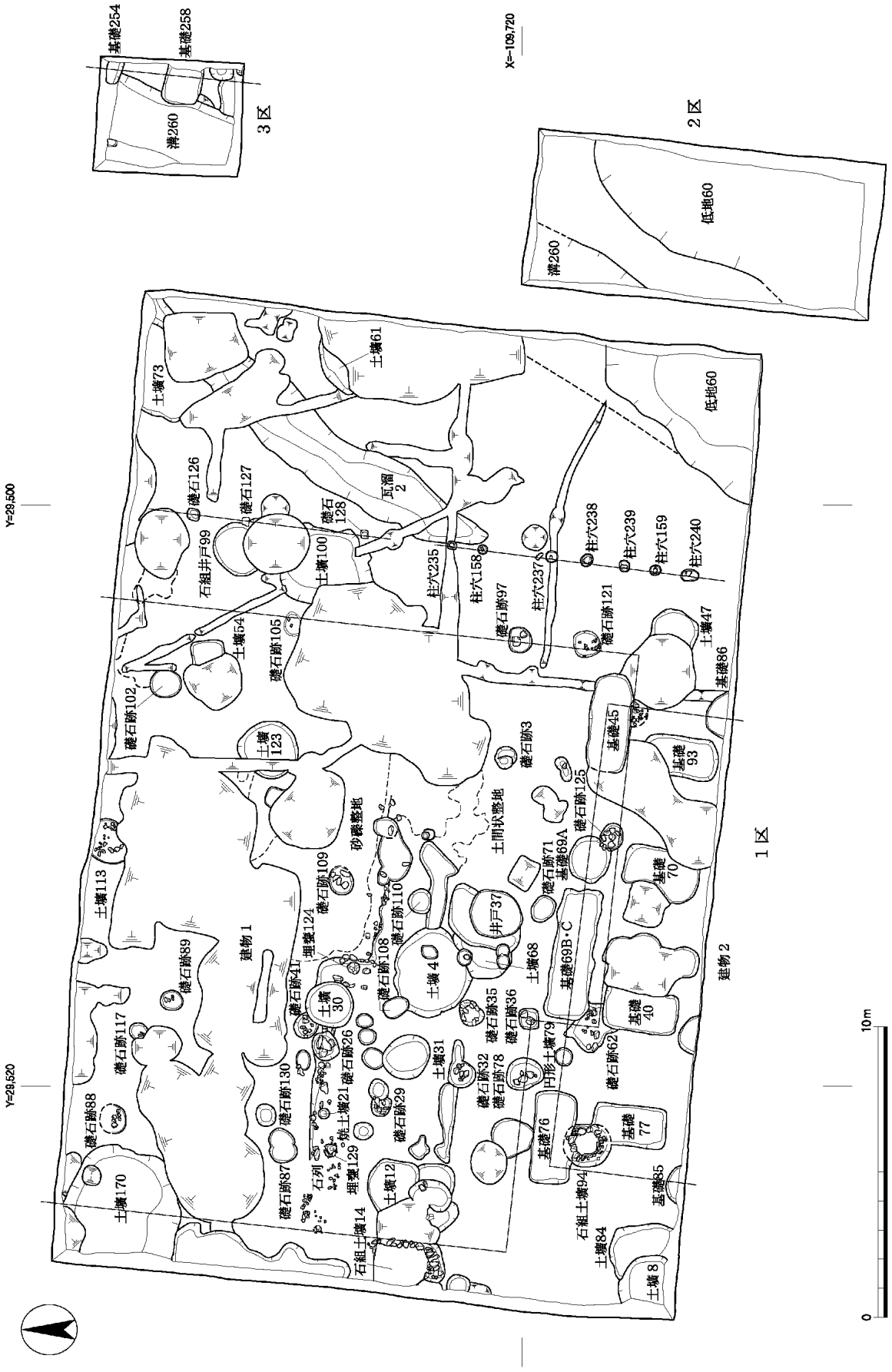


図5　第1面平面図（1：200）

表１　遺構概要表

時　代	遺　　構
江戸時代	建物１、建物２、井戸37、石組土壙14、石組土壙94、土間状整地、塀跡（礎石126～128）、低地60
室町時代	瓦溜２、土壙170、溝260、塀跡（柱穴159、237～240）、低地60
鎌倉時代	景石１、景石２、特殊遺構231、低地60、建物３、溝224
平安時代	溝252、溝261、柱穴247、柱穴251、土壙248～250

が、この面の上位に４層がのる。４層は地点によっては層厚２㎝程度の薄層に細分できる。亀山殿期の整地と考える。北西から南東方向に下る斜面は、３層によってほぼ平坦となる。３層は天龍寺造営期の整地層と考える。３層の上位には、比較的薄い整地層である２層と１層がのる。なお、１区南東隅部分から２区にかけては、さらに低い低地が拡がり、江戸時代の洪水砂礫層を主体とした堆積土で埋没している。

１区の平面的な調査は、１～３層上面と４層上面で行い、前者を「第１面」、後者を「第２面」と呼称した。１区の第２面以下の調査は部分的なものに留めたこと前述のとおりであるが、この部分的な調査は５層上面で行い「第３面」とした。全体が低地にあたる２区では第１面相当面で調査を行った。３区では、第１面と第２面に加えて６層上面を調査し、これを第３面とした。

（３）江戸時代

江戸時代の遺構は第１面で検出した。建物、塀、井戸、石組土壙などがある。以下、詳説する。

建物１は10数基の礎石跡から構成される礎石建ち建物である。礎石跡は、礎石本体が残るものは礎石跡107のみで、他は根固めの礫のみが直径１m前後の掘形内に残るものである。礎石跡の分布から上部構造を復元しえないが、Y=-29,503m付近が東端、Y=-29,525m付近が西端、X=-109,724m付近が南端、北端は調査区外と考える。建物１は北で東に約10°振る方位である。礎石跡は重なりあう部分があり、１度以上の修築がなされていると考える。建物１付近には18世紀末から19世紀にかけての陶磁器類を含む焼土の広がりが部分的に残存する。この建物が火災に遭ったことを示すものである。建物１では一部の礎石跡に先行する土間を検出している。土間と床部分を画すると遺構と思われる石列、信楽の甕を用いた便槽２基（埋甕124・129）、および井戸37がこれに付随すると思われる。石列より北側には砂礫を用いた地業があり、これが床下部分の整地であると考える。これらの遺構は、建物１の想定範囲にほぼ重なり、建物１の前身の建物と考える。石組土壙14は東面と南面にのみ石組を有する。性格は不明であるが、雨水によるものと思われる流入土で埋没しており、屋外に存在した施設と考える。石組土壙94は円形で井戸状の遺構であるが、極めて浅く、湧水レベルに達しないことから、便槽や水溜などと考える。以上の遺構は、いずれも江戸時代後期以降の遺構である。調査地は、18世紀後半以降、天龍寺の塔頭であ

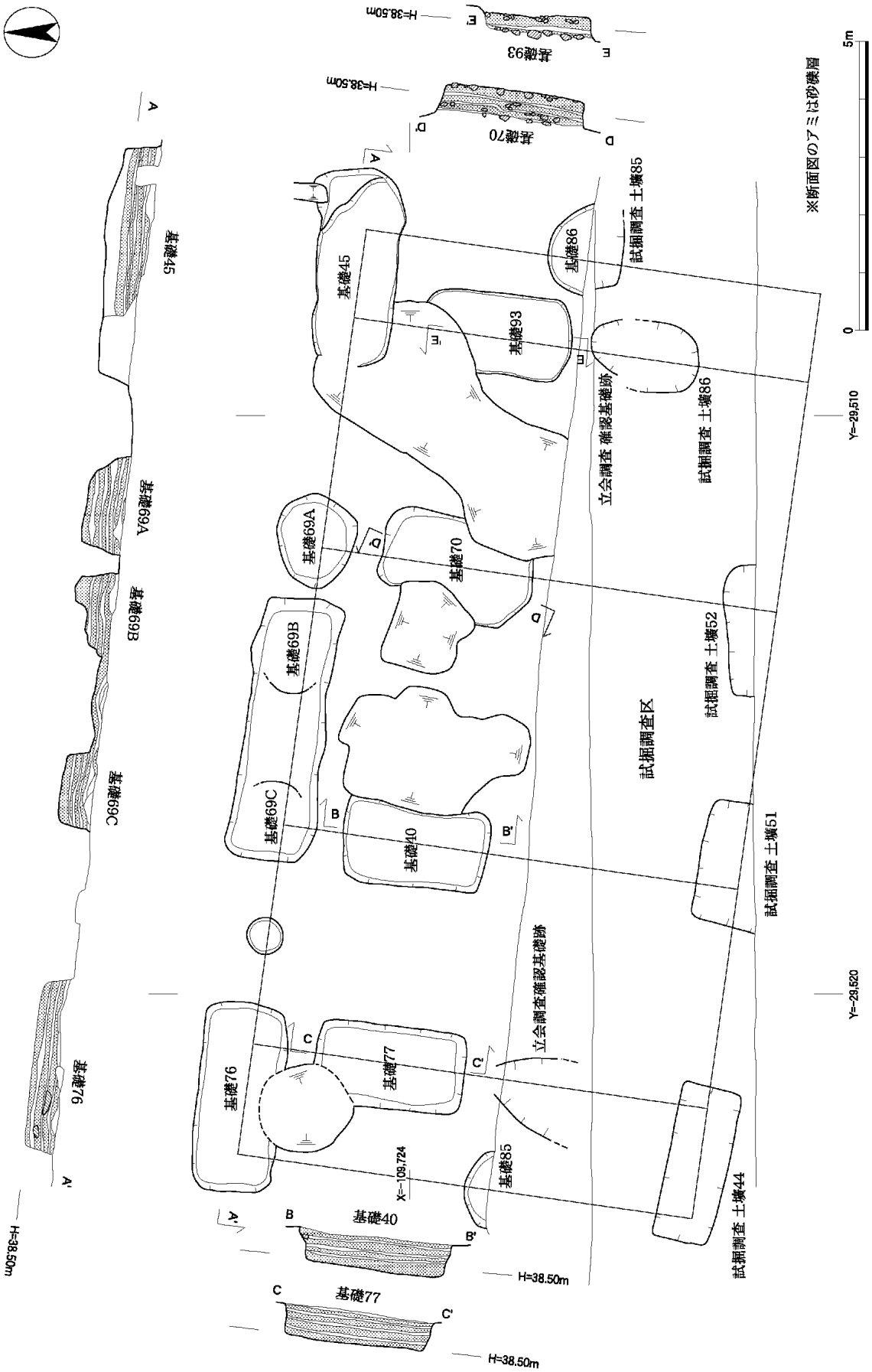


図６　建物２実測図（１：100）

る三秀院が占地した。以上の遺構群は、三秀院のものであろう。三秀院は禁門の変の兵火で全焼しているが、建物１の周囲で検出している焼土層は、これに伴うものであろう。

建物１の東側で建物と同方向の南北方向の柱列を検出した。３基の礎石が直線上に並ぶ遺構で、遺構面上に礎石が露出する（礎石126～128）。柱間は約２mである。江戸時代以降の塀跡と考える。この塀跡の南への延長線上に、後述する室町時代の掘立柱の柱列が並ぶ。室町時代から江戸時代にかけて、塀が維持されたものであろう。塀の方向は、建物１と同様、北で東に約10°振る。

建物１の南側で特異な基礎地業10基で構成される建物２を検出した（基礎40・45・69A・69B・70・76・77・85・86・93）。基礎跡は長方形もしくは円形で内部は砂礫とシルトの薄層を交互に詰み重ねている。試掘調査と立会調査でこの建物の南半を検出しており、それによれば南北約８m、東西約16mの東西に長い建物となる（図６）。上部構造は不明だが、３区でも同様の基礎254・258が検出されており土蔵や土壁作りの長屋、もしくは楼館などの建物基礎となるものであろう。各基礎の埋土から室町時代の遺物が少量出土しているが、基礎地業の手法から、建物２は江戸時代前期頃の遺構と考える。

（４）室町時代

室町時代の遺構は第１面で検出した。塀跡、土壙、瓦溜、堀、流路などがある。建物遺構などは検出していない。以下、詳説する。

江戸時代の塀跡の南の延長線上に、柱穴底に礎石を有する掘立柱７基（柱穴159・237～240）を検出した。柱間は1.1～1.2mである。江戸時代の塀跡（礎石126～128）の南の延長線上にあり、この前身となる塀跡である。

土壙170は南北約４m、東西４m以上、深さ約1.5mある。大型の土壙で、内部から15世紀中頃から後半にかけての多量の土器類が出土した。土師器皿、瀬戸の平椀と天目椀、瓦質土器の火鉢などで構成される良好な一括資料である。埋土は複数の地層に分層されるが、遺物は地層を越えて良く接合し、一時期に埋められたものである。短時期使用のゴミ穴と考える。埋土に焼土や焼灰を含む。天龍寺は応仁の乱の際に焼失しているが、これに伴う遺構の可能性もある。

瓦溜２は、焼けて赤変した瓦がぎっしりと詰まった溝状の遺構である。15世紀後半から16世紀初頭頃の土器類が少量出土している。なお、瓦溜２は前述した塀の南北ラインで止まっており、15世紀にはこの塀による空間区分が存在していた可能性がある。

溝260は１区南東隅から２区北西隅を経過して３区にいたる、北東→南西方向の溝である。幅３m以上、深さ約1.8mある。１区と２区では、埋土の上位は江戸時代の洪水砂礫層で埋没する。埋土の下部から15世紀中頃から16世紀初頭頃の遺物が出土している。戦国時代の防御用の堀と考える。

１区の南東隅から２区にかけて、低地60が広がる。１区や３区の室町時代から江戸時代の遺構面との比高差は約1.5mある。江戸時代前期の洪水砂礫～細粒砂層および人為的な流入土などで埋没している。後述するように、低地60は鎌倉時代には庭園の一部に組み込まれている地形である。

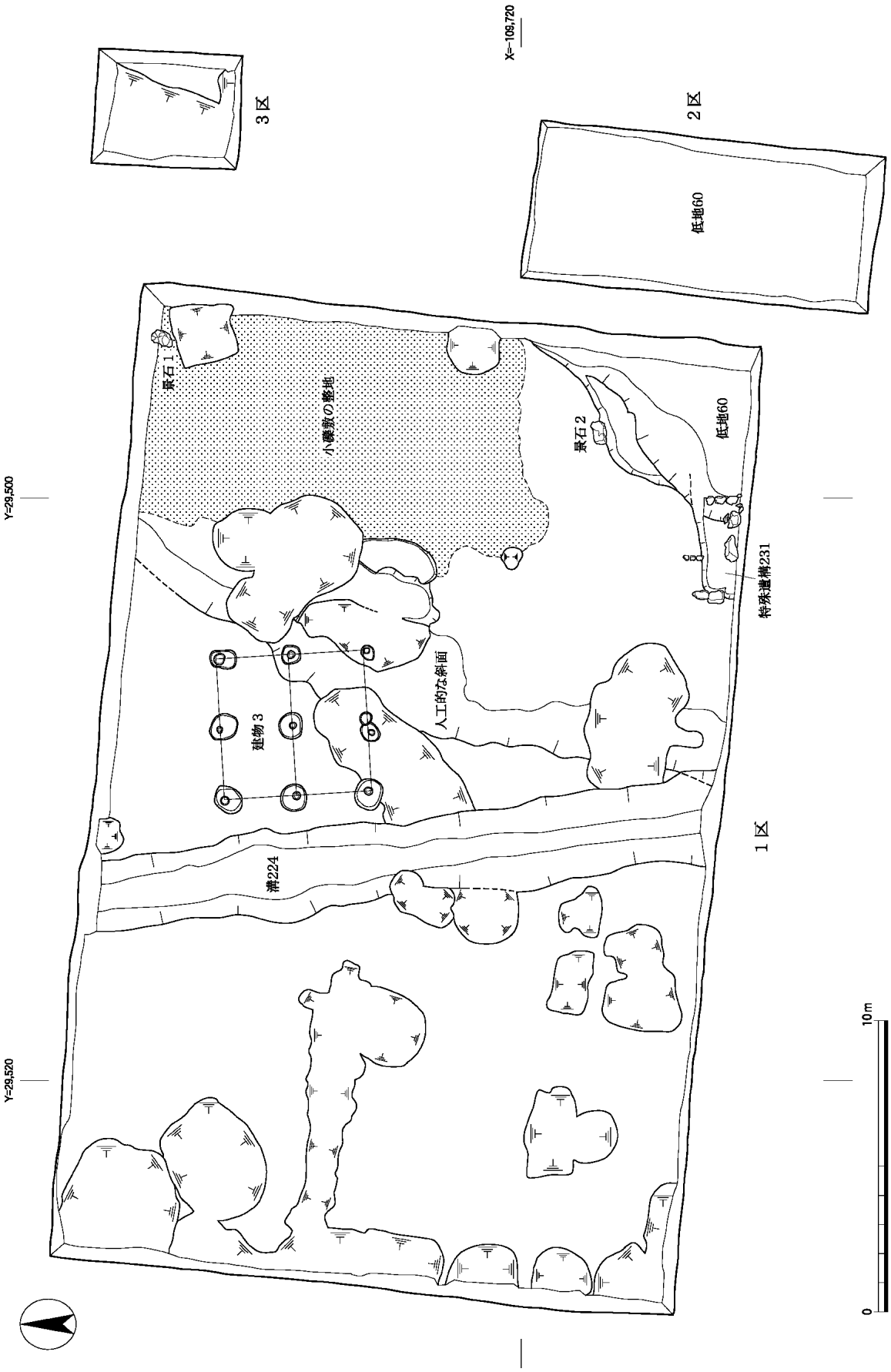


図7　第2面平面図（1：200）

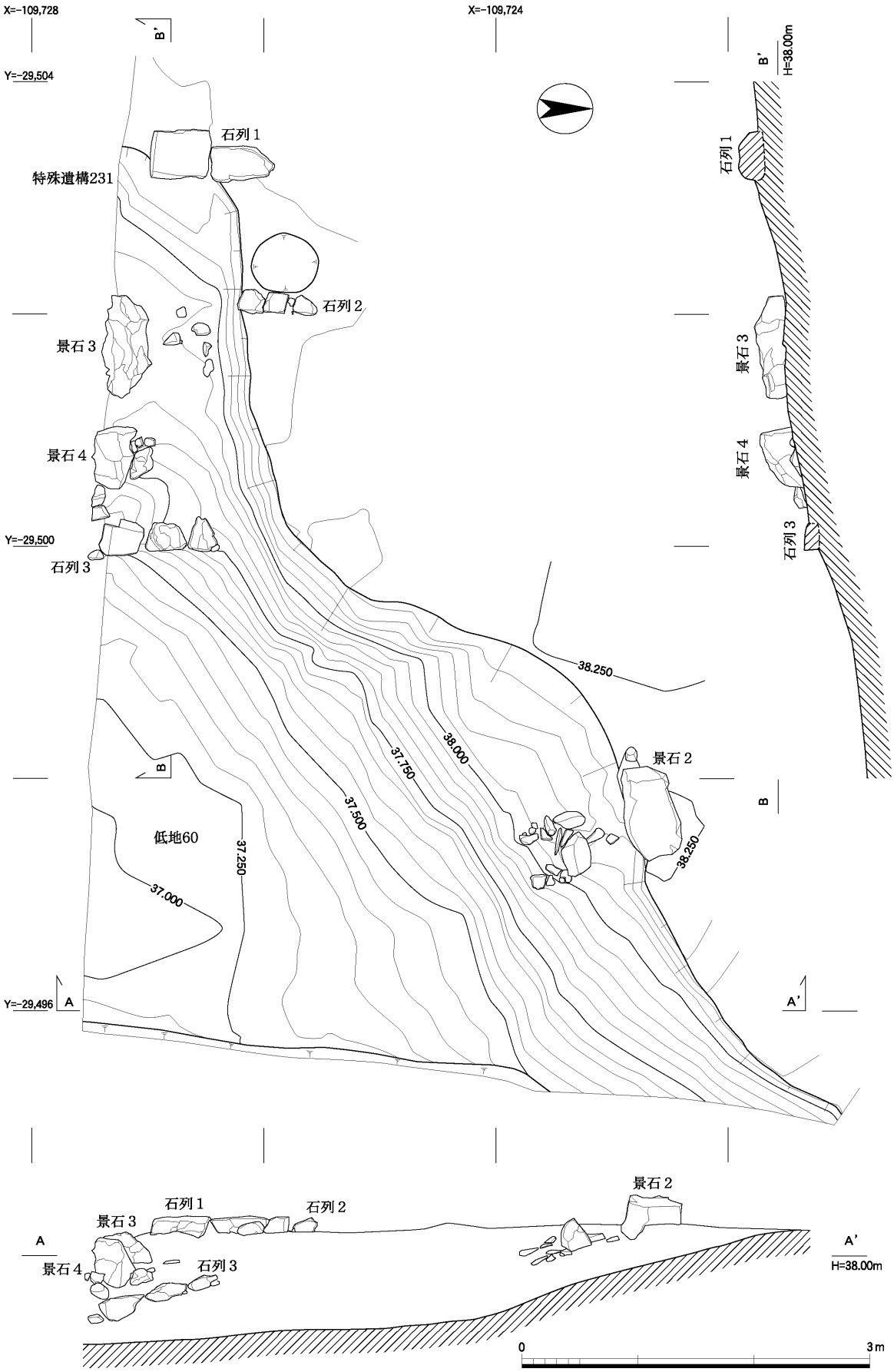


図８　景石２・特殊遺構231実測図（１：50）

桂川左岸の自然地形に起源する低地と考える。

室町時代の遺構は15世紀代のものが顕著であり、この時期に天龍寺関連の施設が営まれたことが推測できる。他方、14世紀や16世紀には際立った遺構や遺物がなく、建物等はなかったものと思われる。

（５）鎌倉時代

天龍寺造営時に行われたと思われる第１面下の整地層（３層）は、調査区北西部で薄く、調査区南東部で厚い。したがって、第２面の鎌倉時代の遺構面は、調査区北西部で高く、南東部に向かって緩やかに下っている。また、調査区中央から東半にかけては、細かな整地層を重ねた人工的な斜面を介して一段低い部分に平坦な面がある。さらに、１区の南東から２区にかけては低地60がある。この地形的な条件を利用した庭園遺構を検出した。また、上段の縁辺部に掘立柱建物１棟を検出し、これも庭園遺構の一部を構成するものと考える。以下、詳説する。

庭園遺構は、低地60とその斜面に作られた特異な石組をもつスロープ状の特殊遺構231、低地60の肩口に配された景石２、中段の平坦面で確認した小礫敷の整地（４層）とそれにのる景石１、中段から上段に向かって緩やかに上がる人工的に整地土で盛り上げられた斜面などで構成される

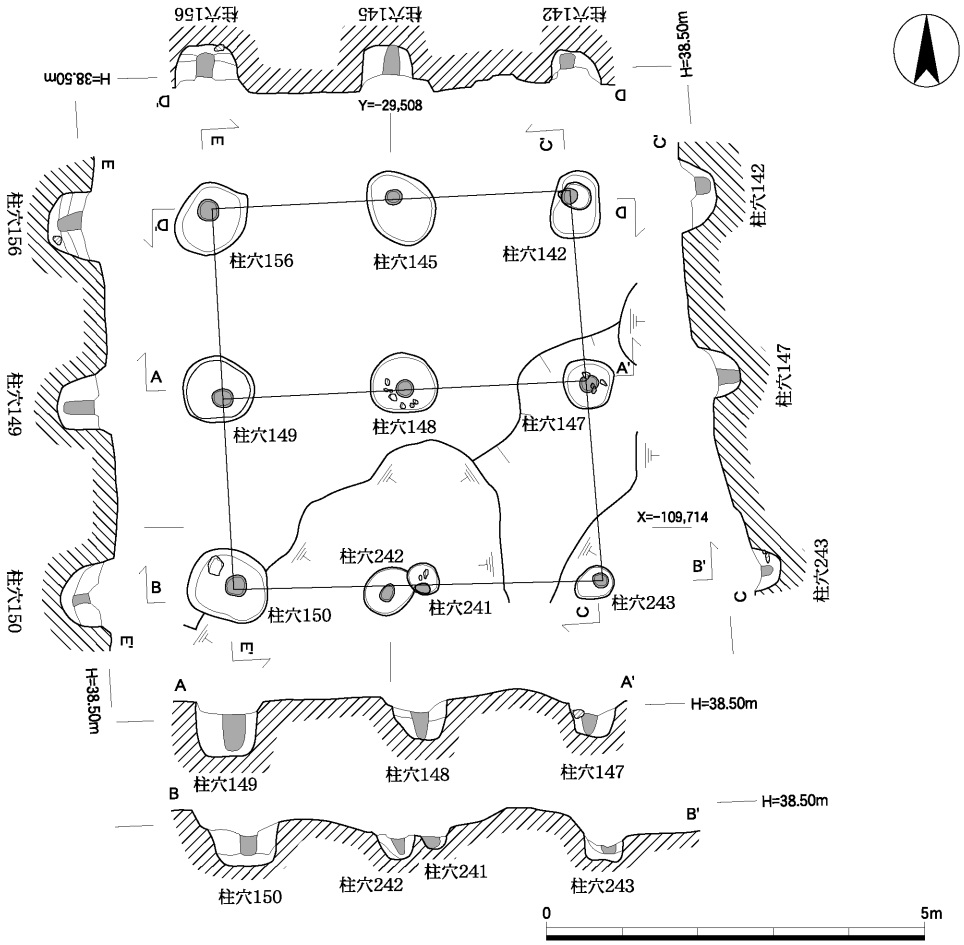


図９　建物３実測図（１：100）

ものである。第２面の段階では、低地60は1.0～1.2mの高低差として存在する。この斜面の一部を緩やかな傾斜に加工して特殊遺構231が構築されている。傾斜の上部肩口には長軸長約50㎝ある整った２石を南北方向に並べた石列１がある。石列１の東辺から東に向かう斜面が始まる。斜面の北肩上に長軸長約20㎝ある３石を南北方向に並べた石列２がある。斜面の途中には長軸長約90㎝ある景石３と長軸長約60㎝ある景石４とが東西方向に並ぶ。特殊遺構231が形成する緩やかな斜面は、長軸長30～40㎝の３石を東西方向に並べた石列３でとまり、石列３の東辺の段を介して低地60の急な傾斜につながる。特殊遺構231の性格を具体的に説明できないが、庭園造作の一部を構成するものと考える。低地60の北肩口に長軸長約90㎝ある景石２がある。低地60の肩口方向に合わせ、上面が平面になるように配している。中段域の北半では、径1.0～3.0㎝の小礫を敷き、固く叩き締めた路面状の整地が広がる。部分的に２～３層の重なりがある。この礫敷整地に基底部を固められた状態で長軸長約80㎝ある景石１がある。以上の庭園遺構は、天龍寺造営時の整地層と考える３層を除去した状態で検出されるため、一連の遺構群と考えられる。また、特殊遺構231から13世紀の遺物が出土していることから、これらの庭園遺構を亀山殿の南庭の一部と考える。

上段の縁辺部には、建物３とした掘立柱建物１棟がある。２間×２間の総柱建物で柱間は2.4～2.5mある。柱穴は直径0.7～1.0mあり、柱痕は直径約20㎝である。中央の柱穴148は東西方向の柱すじに通り、南北方向の柱すじに乗らない。四阿風の建物である。柱穴の埋土からは10世紀代の遺物が出土するが、柱穴の一部が前述した人工的な斜面を切り込むことから、庭園遺構に付随する亀山殿期の建物跡と考える。

建物３の西側に、大規模な南北溝224を検出している。幅2.5～3.0m、深さ1.5～1.7mある。北で西に約10°振る方向で、葛野郡条里の方向に近い。埋土からは９世紀の土器類と瓦類が多く出土しているが、12世紀代に下る土器（57～59）、13世紀代に下る軒平瓦（124）が出土している。埋土の下部からは獣骨が出土している。また、埋土は人為的に一気に埋められており、南端部では亀山殿期と考える整地層に覆われる。以上から、亀山殿以前に存在し、亀山殿造営時に埋められた遺構と考える。溝224の掘削年代の上限は、11世紀末から12世紀ごろの溝252の埋土を切り込むことから、12世紀以降である。溝252については後述する。溝の規模と形状から防御用の堀の可能性が高いが、防御に値すべき施設の存在や戦闘事例が史料に見えないことから、疑問が残る。今のところ遺構の性格を明確にできない。

（６）平安時代

１区で下層確認試掘坑1～３を設け、一部で平安時代の遺構を確認している。３区は、平安時代の遺構面を調査したが、遺構を検出しなかった。２区では北壁沿いと西壁沿いを断割り調査するのみに留めた。

下層確認試掘坑1～３で大規模な溝252を確認した。溝252は溝224の東西壁面でも観察でき、平面図に復元して表現した。第２面の上段から中段へ下る斜面とほぼ同位置の下層に北東から南

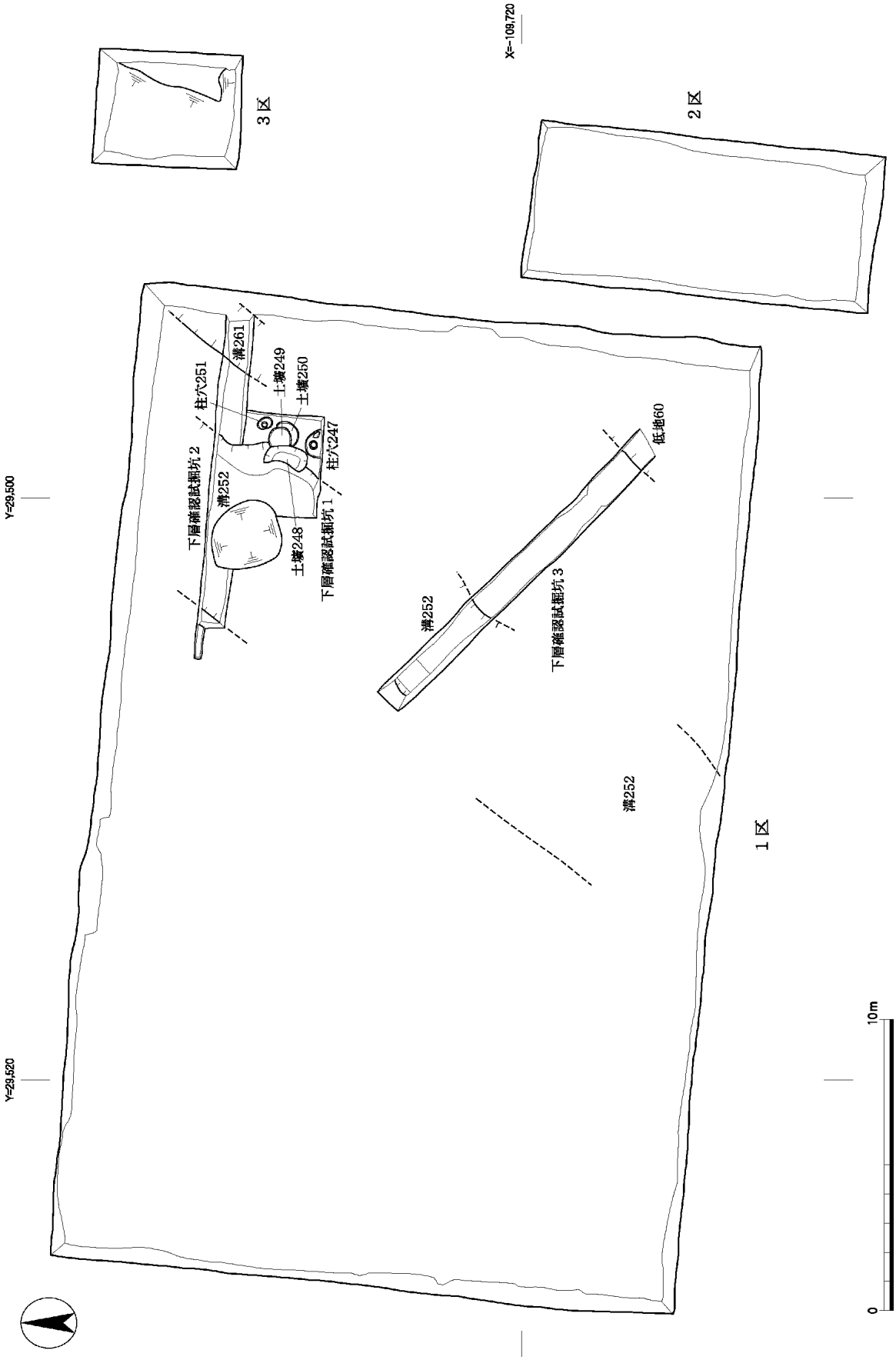


図10　第３面平面図（１：200）

西方向に延びる溝である。幅６m以上、深さは北で約1.0m、南で約2.0mと著しい高低差がある。埋土は人為的な埋め土である。埋土の上位に第２面の斜面を構成する礫質の細かな整地土の重なりが見られる。１区東壁付近では埋土の上面を４層相当層が覆う。埋土から９世紀から10世紀にかけての土器類が多く出土しているが、11世紀末から12世紀にかけての土器類が含まれる。遺構の性格は不明である。

下層確認試掘坑２の東端で溝252と同方向の溝261を確認した。下層確認試掘坑２の北に隣接する攪乱底でも溝261の北東方向への延長部分が確認できた。なお、下層確認試掘坑３では、溝261の南西方向への延長部分は検出していない。幅約1.7m、深さ約0.9mある。埋土から出土遺物はないが、遺構検出面から13世紀前半以前の遺構である。遺構の性格は不明である。

下層確認試掘坑１では、５層上面で柱穴や土壙などを検出している。出土遺物が少なく、時期は明確ではないが、平安時代の遺構群と考える。

４．遺　　物

（１）遺物の概要

縄文時代から近代に至る土器陶磁器類、瓦類、金属製品、動物遺体などが遺物整理用コンテナで141箱分出土している。木製品は出土していない。

（２）土器類

鎌倉時代から室町時代の遺構埋土や整地層から少量の縄文土器片が出土している。そのうち文様を有する破片４点を掲げた（図11）。１と２は太い沈線で文様を表現する波状口縁の破片である。器表の状態が悪く縄文は残存しない。３は同様の文様を有する体部破片である。４はＬ方向の撚糸文を有する体部破片である。いずれも、縄文時代中期末から後期初頭にかけてのものである。

奈良時代後半（８世紀後半）から平安時代中期（10世紀）にかけての土器類は、土師器杯・皿、須恵器杯・皿・壷・瓶子・鉢・甕、緑釉陶器椀・皿、灰釉陶器椀・皿などを中心として平安時代後期以降の遺構埋土や整地層から多く出土している。とりわけ、瓶子類の出土が多く、底部破片による集計で61点が出土している。この時期の土器類がまとまって出土した溝224の遺物を掲げた（図12）。５～22は土師器である。５～９と15および21は杯である。５と８は内面に暗文を施

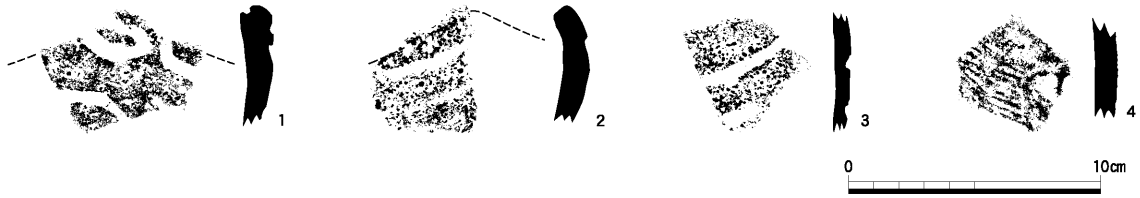


図11　１区出土縄文土器拓影・実測図（１：３）

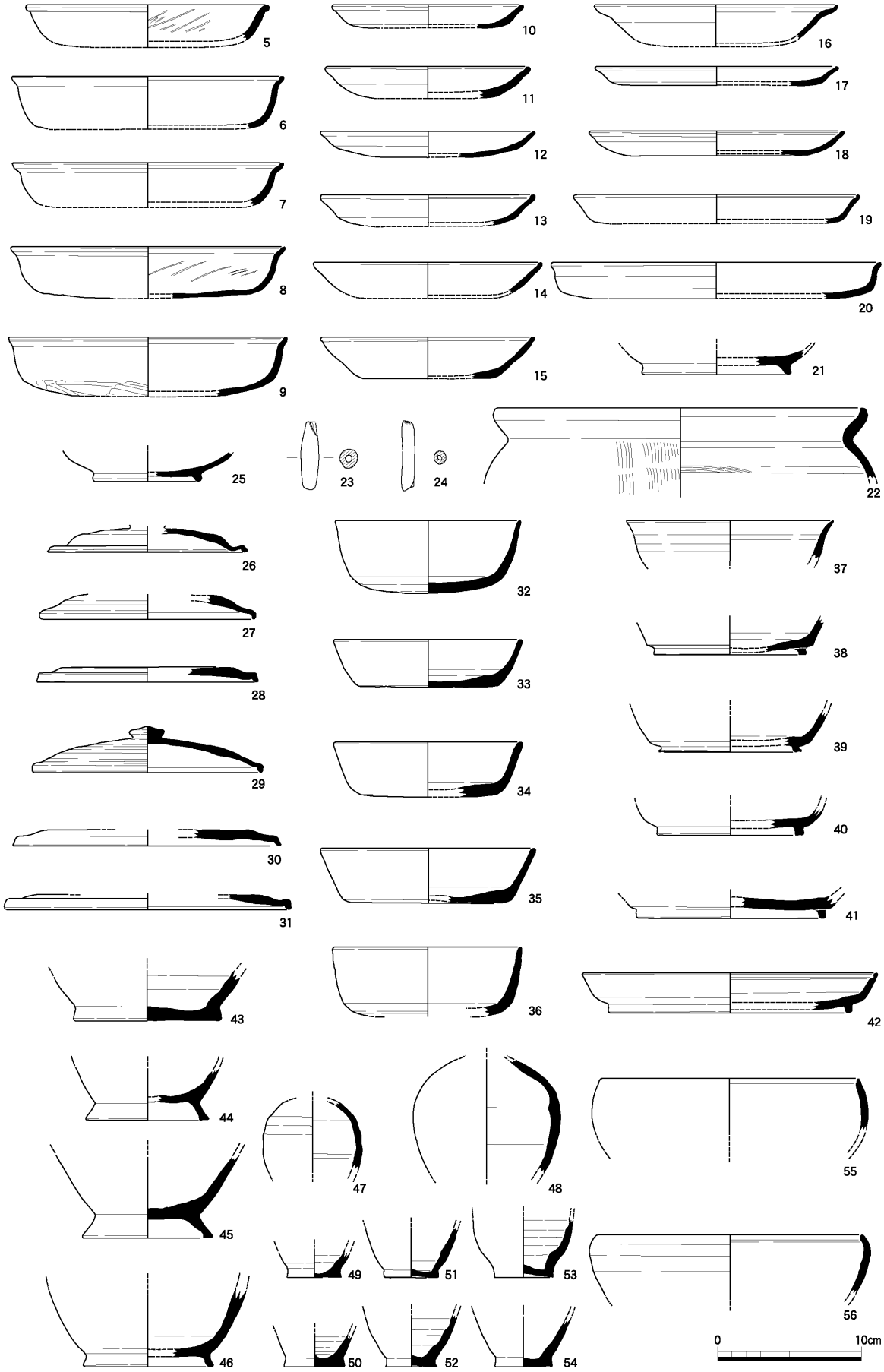


図12　溝224出土奈良時代から平安時代前期土器類実測図（１：４）

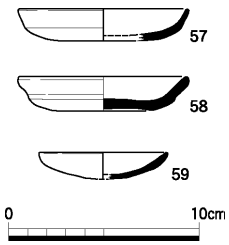


図13　溝224出土平安時代後期から鎌倉時代土師器実測図（１：４）

図14　特殊遺構231出土土師器実測図（１：４）

し、６と８と９の底部はヘラ削りする。21は高台を有する形式である。22は体部内外面をハケ目調整する甕である。23と24は土師質の土錘である。25は緑釉陶器の皿である。26～56は須恵器である。26～31は杯蓋である。29は天上部外面を回転ヘラ削りする。32～42は杯である。32～36は高台のない形式、38～42は高台を有する形式、37は不明である。32と36は底部の外周をヘラ削りする、33～35の底部はヘラ切り不調整である。43～54は壷・瓶子類である。43と49～54は底部に糸切痕を残す。55と56は鉢である。土器型式名では、平城宮Ⅴ期から平安京編年のⅡ期にわたる資料である[7)]。

平安時代後期から鎌倉時代の土器類の出土量は大変少なく、いずれも小片である。遺構の年代を知るうえで重要な資料を掲げた。57～59は、溝224から出土した土器群のうち最も新しい年代を示すものである（図13）。いずれも土師器皿で、口縁部外面に強いヨコナデを施す。平安京編年のⅤ期新からⅥ期中に比定でき、12世紀後半から13世紀前半のものである[8)]。60は、亀山殿期の庭園遺構と考える特殊遺構231から出土した土師器皿である（図14）。平安京編年のⅥ期中からⅦ期古に比定でき、13世紀前半から後半のものである[9)]。

室町時代の土器類は、調査区全体から一定量が出土している。15世紀代のものが大半を占め、

表２　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
縄文時代	縄文土器	156箱	縄文土器４点	０箱	93箱
奈良時代～平安時代前期	土師器、土錘、緑釉陶器、須恵器、灰釉陶器		土師器17点、土錘２点、緑釉陶器１点、須恵器34点	１箱	
平安時代後期	土師器		土師器３点	０箱	
鎌倉時代	土師器		土師器１点	０箱	
室町時代	土師器、須恵器、瓦質土器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器		土師器40点、須恵器１点、瓦質土器３点、施釉陶器９点、焼締陶器１点	17箱	
江戸時代以降	土師器、磁器、施釉陶器、焼締陶器、瓦質土器等			３箱	
奈良時代～江戸時代	軒丸瓦、軒平瓦、平瓦類、丸瓦、棟端瓦、塼		軒丸瓦11点、軒平瓦17点、軒桟瓦２点、刻印を有する瓦６点、斜格子タタキ目を有する瓦２点	27箱	
平安時代～江戸時代	砥石、硯、石臼、鉄釘、銭、煙管、貝、獣骨、炭サンプル、土サンプル			５箱	
合　計		156箱	152点（９箱）	54箱	93箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より15箱多くなっている。

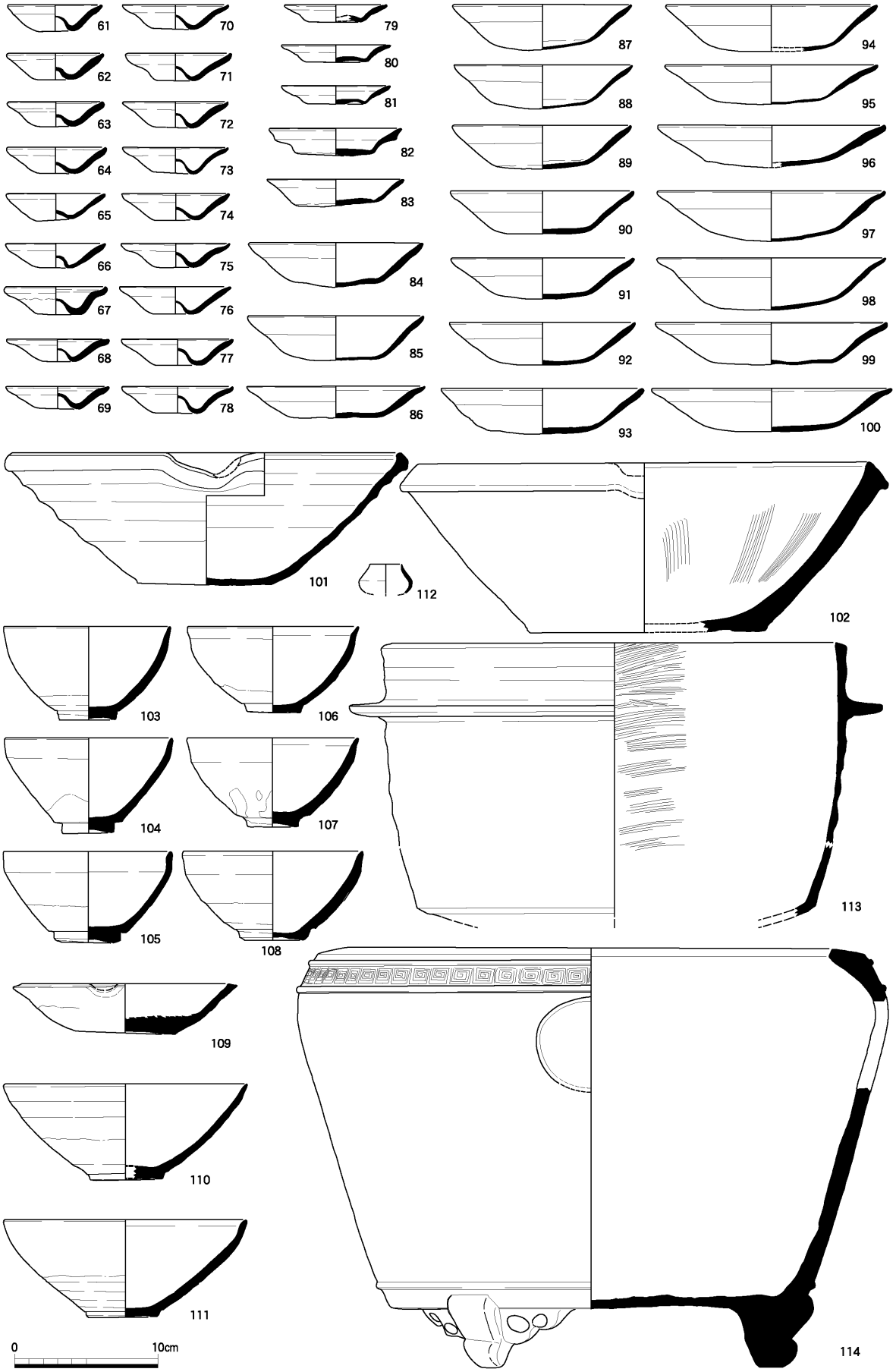


図15　土壙170出土土器・陶器類実測図（1：4）

14世紀代、16世紀代のものはわずかである。室町時代の土器類のうち土壙170からは、長軸長1.0cm以上の破片で12,812点が出土している。種類別の内訳を示すと、土師器12,296点（95.97%）、施釉陶器192点（1.50%）、須恵器169点（1.32%）、瓦質土器130点（1.01%）、焼締陶器19点（0.15%）、瓦器６点（0.05%）である。土壙170出土土器類のうち、主なものの実測図を掲げた（図15）。61～100は土師器である。61～78はいわゆるへそ皿である。口径は6.6～7.8cmある。79～82は赤色系の小皿である。口径は7.2～9.2cmある。83～100は白色系の皿である。口径は9.6～16.8cmある。101は東播磨系須恵器の片口鉢である。102は備前焼締陶器の擂鉢である。103～111は施釉陶器で、すべて瀬戸産である。103～108は天目椀、109は灰釉の卸皿、110と111は灰釉の平椀である。112は瓦器の小壷である。113は瓦質土器の釜、114は瓦質土器の火鉢である。土壙170の土器群は平安京編年のIX期古～中に比定でき、15世紀中頃から後半のものである。[10)]

（３）瓦　類

奈良時代から平安時代の瓦類は、調査区の全域から多量に出土している。とりわけ、13世紀の遺構である溝224からは、平安時代の瓦類が長軸長3.0cm以上の破片で1,600点出土している。出土軒瓦のうち主なものを掲げる（図16）。115は単弁17弁蓮華文軒丸瓦で、斜縁に鋸歯文をめぐら

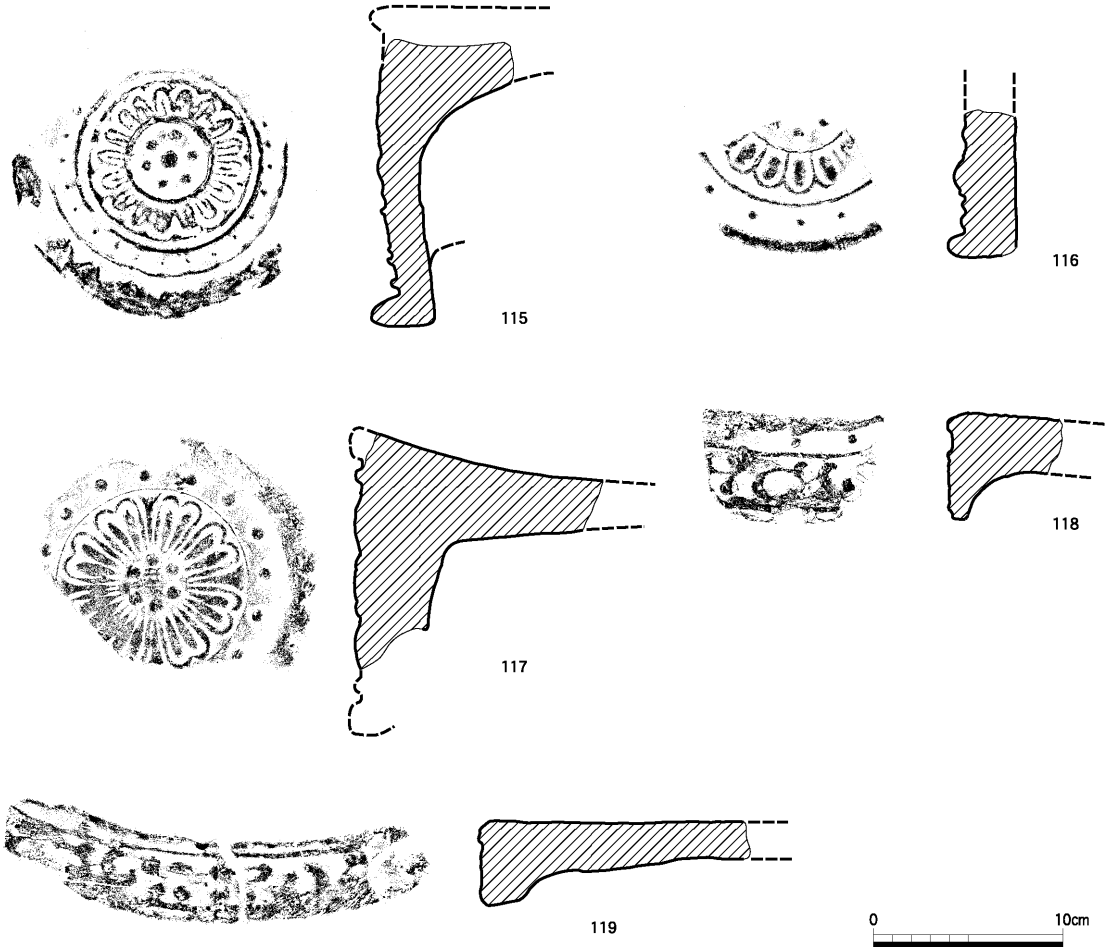


図16　奈良時代から平安時代軒瓦拓影・実測図（１：４）

す平城宮式系のものである。この種類はこれ１点のみ出土している。室町時代の整地層である３層から出土した。116は単弁弁数不明の平安時代の軒丸瓦で、この種類はこれ１点のみ出土している。溝224から出土した。117は中房に「栗」銘を有する複弁８弁の軒丸瓦で、この種類はこれ１点のみ出土している。外区に「三」字状の笵キズがある。溝224から出土した。118と119は平安時代後期の均整唐草文軒平瓦である。118は１点のみ、119は同笵と思われるものがこれ以外に12点出土している。118と119および119と同笵と思われる12点は、すべて溝224から出土している。森ヶ東瓦窯産と思われる[11)]。118と119はいずれも、にぶい黄橙色を呈し軟質である。同様の胎土と焼成の丸瓦平瓦類が、溝224を中心として調査区全域から多く出土している。

鎌倉時代の瓦類は調査区各地点で出土しているが、平安時代の瓦類や室町時代の瓦類に比べて少量である。主な軒瓦類を掲げた（図17）。120～123は、いずれも小型の軒丸瓦である。軒ではなく棟を飾る甍瓦の可能性がある。120は複弁弁数不明の軒丸瓦で、低地60を埋める室町時代の整地層から出土している。この種類は、これ１点のみが出土している。121は巴文の軒丸瓦で、外区がない。第２面直上の室町時代整地層から出土した。この種類はこれ以外に２点あり、いずれも低地60を埋める室町時代の整地層から出土している。122は巴文軒丸瓦で、内区と外区を圏線で画し、外区に珠文を配する。近代の攪乱坑から出土した。この種類はこれ１点のみが出土して

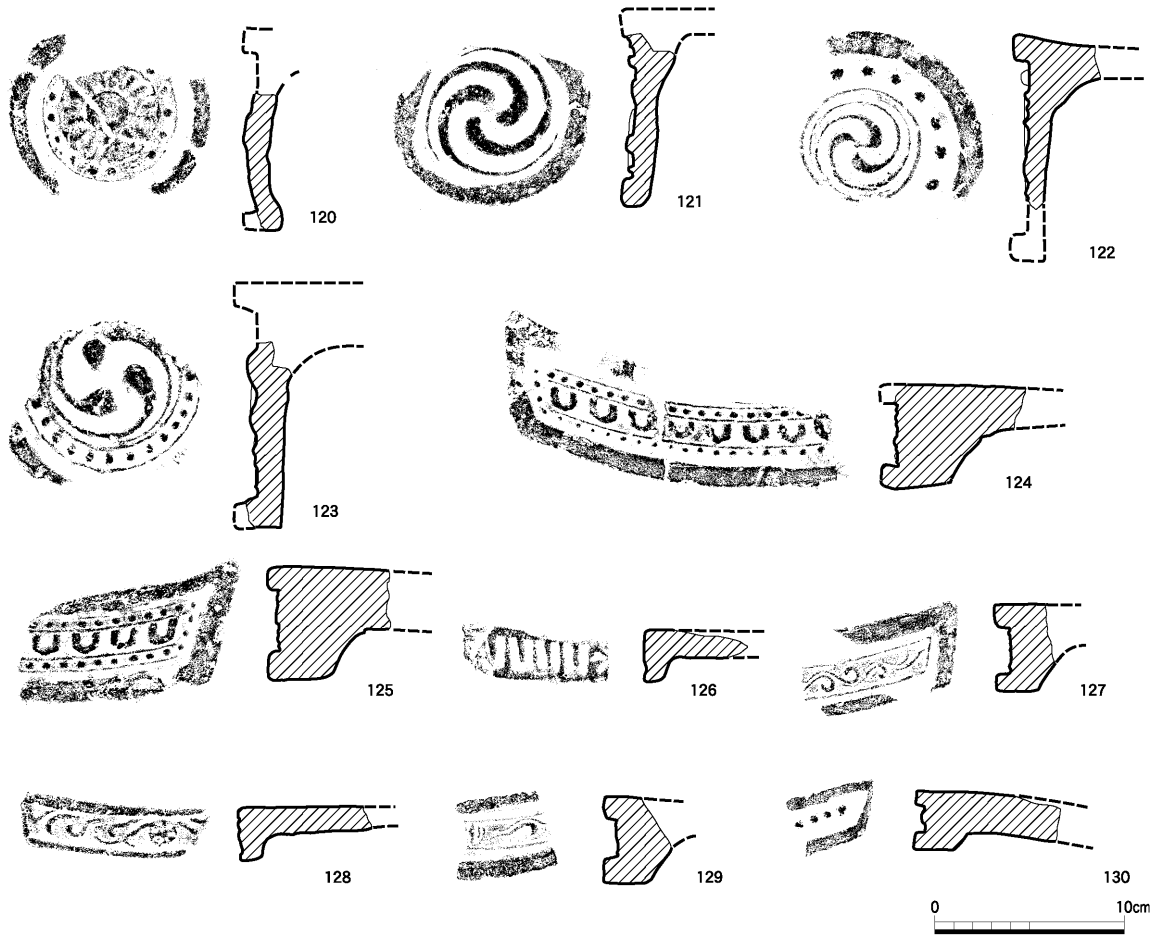


図17　鎌倉時代軒瓦拓影・実測図（１：４）

いる。123は巴文軒丸瓦で、外区を内外二重の圏線で画し、珠文を配している。室町時代の瓦溜２付近から出土している。同笵と思われるものがあと２点あり、いずれも瓦溜２付近で出土している。124～130は軒平瓦である。このうち126～130は小型のもので、軒ではなく棟を飾る甍瓦の可能性がある。124と125は剣頭文の軒平瓦で、いずれも同笵と思われる。外区には珠文がめぐる。上下の外区は２条の圏線で画されるが、左右の外区には圏線がない。顎部に凹型台の圧痕が残る。[12] 124は室町時代の土壙170から出土した。125は低地60を埋める室町時代の整地層から出土した。これらと同笵と思われるものが、溝224と土壙170から出土している。126は剣頭文の軒平瓦である。第２面で採集した。この種類はこれ１点のみ出土している。127は唐草文の軒平瓦である。室町時代の土壙170から出土した。この種類はこれ１点のみ出土している。128は均整唐草文軒平瓦である。ネガティブな花弁状の中心飾である。低地60を埋める室町時代の整地層から出土した。この種類はこれ１点のみ出土している。129は均整唐草文軒平瓦である。室町時代の瓦溜２付近で出土した。この種類はこれ１点のみ出土した。130は珠文のみを横一列に並べる軒平瓦である。室町時代の整地層である３層から出土した。この種類はこれ１点のみ出土した。

室町時代の瓦類は、土壙170や瓦溜２などを中心に多量に出土している。15世紀中頃から後半の土壙170では、長軸長3.0㎝以上の破片で775点が出土している。種類別の内訳は、軒丸瓦１点（0.13%）、軒平瓦６点（0.77%）、雁振瓦11点（1.42%）、丸瓦類155点（20%）、平瓦類310点（40%）、塼258点（33.29%）、棟端瓦1点（0.13%）、不明33点（4.26%）である。塼が多いのが特徴的である。15世紀末から16世紀初頭の瓦溜２では、長軸長3.0㎝以上の破片で9,025点が出土している。種類別の内訳は、軒丸瓦16点（0.18%）、軒平瓦21点（0.23%）、丸瓦類1,657点（18.36%）、平瓦類6,898点（76.43%）、塼52点（0.58%）、雁振瓦６点（0.07%）、棟端瓦１点（0.01%）、不明374点（4.14%）である。[13] 瓦溜２では、土壙170に比べて塼が少ない構成になっている。塼の厚さは、おおむね4.0～5.0㎝の範囲におさまる。２角を残す塼の破片が調査区全体で３点出土しており、一辺の長さが23.6～24.1㎝であることがわかる。また、これ以外に厚さ2.8㎝程度の薄手の塼が数点出土している。また、室町時代の瓦類には、刻印を有するものや特徴的なタタキ目を有するものがあるが、これについては後述する。室町時代の軒瓦類のうち、主なものを掲げた（図18）。131は巴文の軒丸瓦である。内区と外区は一条の圏線で画されるが外区の外側に圏線はない。低地60の江戸時代前期の洪水砂礫層から出土した。同じ種類のものが他に１点出土している。132は内区に「天」、「龍」、「寺」の３字がある軒丸瓦である。土壙170から出土した。この種類はこれ１点のみ出土している。133と134は内区に「天」１文字がある軒丸瓦である。二次的に被熱し赤変する。いずれも瓦溜２から出土している。この２点以外に13点出土しており、うち12点は瓦溜２、１点は低地60を埋める江戸時代の整地層から出土している。135は瓦当に「天」字と円形浮文状の飾り部分が残る軒平瓦の破片である。低地60を埋める江戸時代洪水砂礫層から出土した。この種類はこれ１点のみ出土している。136～139は、巴文の中心飾の左右に流水文を表す軒平瓦である。二次的に被熱し赤変する。平瓦部の瓦当も向かって左上と平瓦部の凸面に落下防止の瓦止めを有する。136・137・139は瓦溜２、138は低地60を埋める江戸時代の洪水

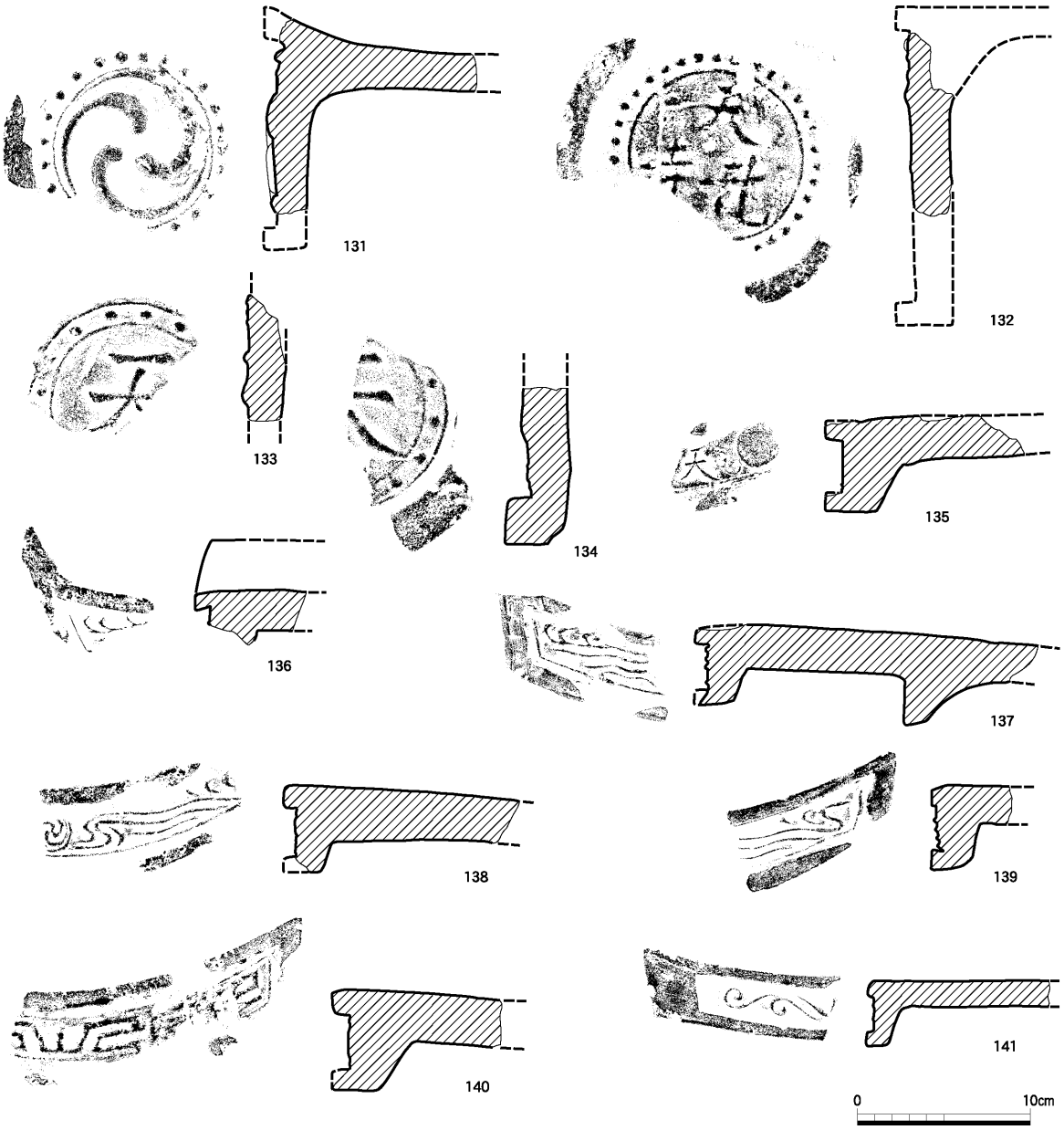


図18　室町時代軒瓦拓影・実測図（１：４）

砂礫層から出土した。同じ種類の軒平瓦は、図示した４点以外に18点出土しており、うち14点は瓦溜２から、３点は低地60から、１点は基礎70から出土している。133・134の「天」字軒丸瓦とセットを構成するものである。140は、直線的な幾何学文の軒平瓦である。二次的に被熱し赤変する。土壙170から出土した。この種類はこれ１点のみ出土している。141は均整唐草文軒平瓦である。中心飾と２反転する唐草は近世軒平瓦の瓦当文様に通じるものである。２区の江戸時代の瓦溜から出土しているが、向かって左側の周縁が狭いため室町時代のものと考えた。

江戸時代の瓦類は、調査地の各所で丸瓦、平瓦、桟瓦、塼などが出土しているが、軒瓦を中心に主なもののみ選択的に採り上げている。塼は全体の形状がわかるものが、土壙100から１点出土している。厚さ3.5㎝、一辺の長さは26.0㎝あり、裏面にキザミを入れる。室町時代のものより薄く、大きい。主な軒瓦を掲げた（図19）。142は宝珠文の左右に２反転する雲形唐草を配する軒

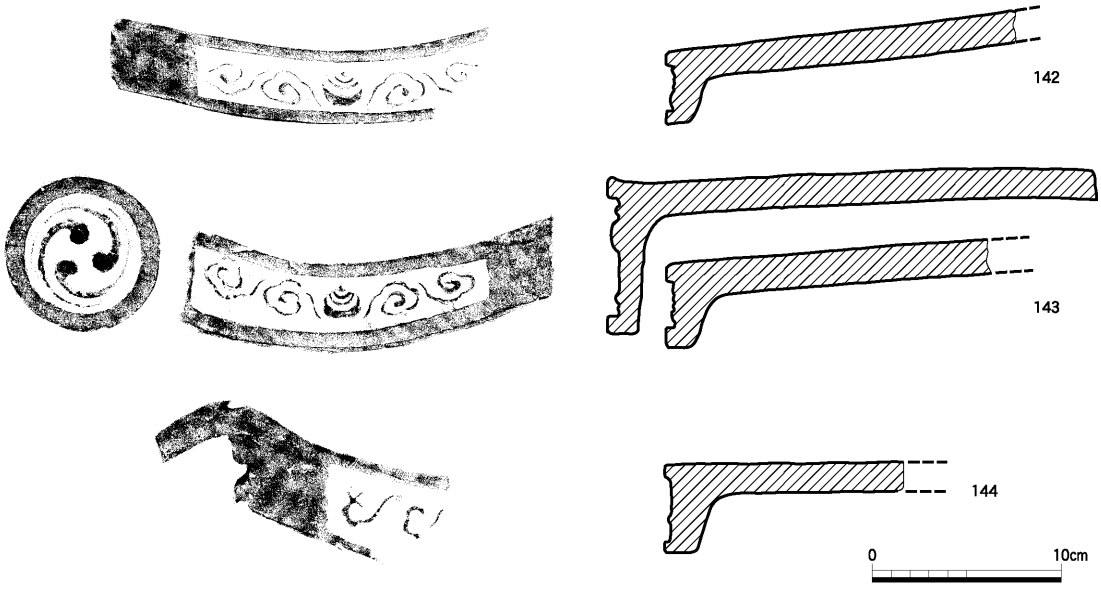


図19　江戸時代軒瓦拓影・実測図（１：４）

平瓦である。２区の江戸時代瓦溜から出土した。143は142と同文の平部に巴文の丸部を付けた丸付軒桟瓦である。石組土壙94から出土した。同遺構から、同笵の平瓦部の破片をこれ以外に２点採取している。144は雲形唐草文の軒桟瓦である。１区の江戸時代整地層から出土している。

刻印が捺された瓦は６種類22点が出土している。すべて室町時代のものである。主なものを掲げた（図20）。145は単純な円印を塼の側縁に捺すものである。土壙170から出土した。同様の刻印はこれを含めて12点出土しており、その内９点は土壙170から出土している。８点は塼に捺し、４点は丸瓦に捺す。146は円形の凹みのなかに「二」字状の凸部がある印を、塼の側縁に捺す。土壙170から出土した。同様の刻印を丸瓦に捺すものがこれ以外に１点あり、同じく土壙170から出土している。147は４葉の花弁状の刻印を、丸瓦外面の玉縁側段部に捺すものである。土壙160から出土した。この種類の刻印はこれ１点のみ出土している。148は、円形の凹みのなかにポジティブな菊花状がある刻印を、丸瓦外面の玉縁側段部に捺すものである。土壙160から出土した。149は同様の刻印を塼の側縁に捺すものである。土壙160から出土した。同様の刻印を有する１点が土壙170からも出土している。150は六角形の刻印を塼の側縁３箇所に捺すものである。土壙170から出土した。この刻印はこれ１点のみ出土している。

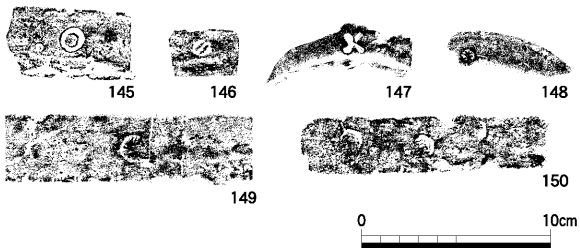


図20　室町時代瓦類の刻印拓影（１：４）

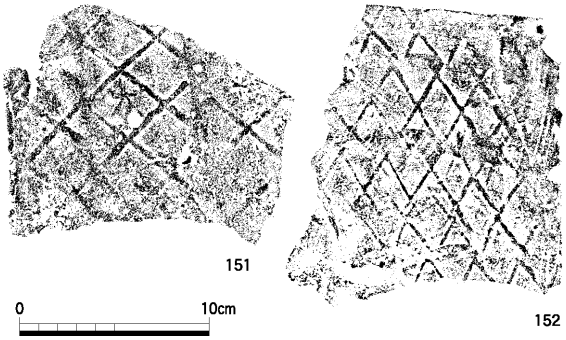


図21　室町時代平瓦のタタキ目拓影（１：４）

斜格子タタキを有する室町時代の瓦類が出土している（図21）。151と152はいずれも平瓦凸面のタタキ目である。151には格子の中に「天」字がある。151は土壙170、152は土壙160から出土している。同様のタタキ目を有する瓦類は他に多数出土している。塼の裏面に同様のタタキ目があるものも出土している。

（4）自然遺物

鎌倉時代に埋められた溝224から獣骨が出土している。ウマの歯が多量にあり、ニホンジカの寛骨が含まれる。これらは、溝224の底面からやや上位にかけて集中して出土している。溝224は人為的に一気に埋められているので、埋没時に溝底にウマやシカの遺体が遺存していたものと思われる[14)]。

5．ま と め

第２面の遺構群が地下保存されることになったため、平安時代以前の調査は部分的なものに留まった。しかし、溝、柱穴、土壙など平安時代以前の遺構の存在を確認した。土器類は奈良時代後半から平安時代前期のものが多量に出土した。瓦類は奈良時代から平安時代前期のものもあるが、とりわけ平安時代後期のものが多量に出土している。以上から、奈良時代の後半から平安時代後期にかけて調査地周辺で何らかの施設が経営されていたことは明らかである。出土土器類のうち須恵器の瓶子が多いこと、瓦の出土量が多いことなどから寺院的な施設の存在が想像できる。なお、平安時代前期の遺構と遺物は、今回調査地周囲の調査ですでに確認されていた。とりわけ、今回調査地の北東50～90mで行われた1988年の発掘調査では、平安時代前期の庭園遺構が見つかっており、今回調査で確認した遺構群との関連が注目される。

第２面で検出した溝224をのぞく鎌倉時代の庭園遺構は、亀山殿の南庭を構成するものである。大堰川、嵐山を取り込んだとされる庭園遺構の一端が明らかになった。低地60は、大堰川によって形成された自然地形と考えるが、亀山殿南庭はこうした自然地形を利用して作庭されているのであろう。建物３は、亀山殿期と考える上段から中段への斜面整地上に一部の柱穴が検出されることから、これも亀山殿期遺構と考えた。亀山殿庭園の一部を構成する四阿風の遺構と考えたい。

室町時代の天龍寺の関連する建物遺構などは検出できなかったが、15世紀の土器類を多量に含む土壙が検出され、同時期の瓦も多く出土していることから、寺域の南端部である調査地付近にも15世紀には何らかの寺院施設が存在したことが明らかである。とりわけ15世紀中頃から後半の遺構である土壙170からは多量の塼が出土しており、この時期に塼敷の建物が近隣に存在した可能性がある。また、15世紀後半から16世紀初頭の遺構である瓦溜２では、「天」字文の軒丸瓦と流水文の軒平瓦のセットを含む瓦群で構成され、塼が少ないものである。上記とは別の建物も存在したようである。さらに、この時期調査地の東端部には大規模な防御用の濠が作られる。遺構と遺物の状況から考えると、天龍寺の寺域の南端に該当するこの調査地では、15世紀頃に仏堂等

の建物が進出したものと思われる。

江戸時代前期には、性格不明の建物２が作られる。この時期、低地60は洪水起源の砂礫層と整地層で埋められる。18世紀後半以降の建物１は、19世紀中頃に禁門の変で焼失した天龍寺塔頭の三秀院の遺構であると思われる。

出土した軒瓦の帰属施設を類推しておきたい。115～119は、奈良時代後半から平安時代後期にわたるもので、亀山殿に先行する施設で使用されたものであろう。124・125は鎌倉時代の軒平瓦であるが、亀山殿に先行する溝224から出土していることから、これも亀山殿に先行する建物に用いられたものと考える。120～123の軒丸瓦、126～130の軒平瓦は、亀山殿の殿舎に用いられたものと考える。全体的に小振で、甍棟に用いられたものが含まれよう。131の軒丸瓦は室町時代の挿図に掲載したが、帰属施設としては亀山殿所用のものであろう。132～141は天龍寺の仏堂等に用いられたものである。142～144は天龍寺の塔頭三秀院の建物に用いられたものと考える。[15)]

註

1） 西山良平「山城国葛野郡班田図」金田章裕他編『日本古代荘園図』東京大学出版会、1996年2月、197～212頁。

2） 川上　貢「亀山殿の考察」同『日本中世住宅の研究〔新訂〕』中央公論美術出版、2002年5月、119～137頁。

3） 田原周仁他編『嵯峨誌　平成版』財団法人嵯峨教育振興会、1998年3月。

4） 木下保明「史跡名勝嵐山」財団法人京都市埋蔵文化財研究所編『昭和63年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1993年3月、106～108頁。

5） 加納敬二・小檜山一良・平田　泰編『京都嵯峨野の遺跡－広域立会調査による遺跡調査報告－』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1997年2月。

6） 加納敬二・小檜山一良・平田　泰編『京都嵯峨野の遺跡－広域立会調査による遺跡調査報告－』前掲。

7） 奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告Ⅶ』1976年3月、および小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」財団法人京都市埋蔵文化財研究所編『研究紀要』３、1996年11月、187～271頁。

8） 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」前掲。

9） 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」前掲。

10） 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」前掲。

11） 加納敬二・小檜山一良・平田　泰編『京都嵯峨野の遺跡－広域立会調査による遺跡調査報告－』前掲。

12） 山崎信二『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所、2000年3月。

13） 瓦溜２出土の瓦類は、現地調査時に洗浄・分類し、破片数を計測したうえで、大半は現地に埋め戻した。採取したのは、サンプル的に採取した平瓦・丸瓦類16箱と軒瓦類のみである。

14） 獣骨の種類については、松井章氏と丸山真史氏の御教示を得た。

図　　版

報　告　書　抄　録

ふりがな	しせき・めいしょう　あらしやま
書名	史跡・名勝　嵐山
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報
シリーズ番号	２００４－７
編著者名	内田好昭
編集機関	財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発行所	財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2004年11月30日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
史跡・名勝 嵐山（しせき・めいしょう あらしやま）	京都市右京区天龍寺芒ノ馬場町11番地（きょうとしうきょうく てんりゅうじすすきのば ばちょう）	26100	A809	35度00分38秒	135度40分36秒	発掘調査 2004年６月７日～2004年９月25日 立会調査 2004年10月25日～2004年11月30日	約800㎡	建物新築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
史跡・名勝 嵐山	史跡・名勝	奈良時代～平安時代	溝、柱穴、土壙	土師器、須恵器、緑釉陶器、土錘、瓦類	
		鎌倉時代	溝、庭園跡、建物跡	土師器、瓦類	
		室町時代	瓦溜、溝、土壙、塀	土師器、須恵器、施釉陶器、焼締陶器、瓦質土器、瓦類	
		江戸時代	建物跡、石組み土壙、井戸、土間、塀	土師器、施釉陶器、焼締陶器、瓦質土器、磁器、瓦類	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報　2004-7

史跡・名勝　嵐山

発行日　2004年11月30日

編　集
発　行　財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の１
〒602-8435　℡ 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　℡ 075-256-0961